

山と博物館

第47巻 第10号 2002年10月25日 市立大町山岳博物館



シンポジウムでは時折メモをとりながら熱心に聴き入る参加者が多く見られた

岳の街おおまちと山岳環境を考える

大町山岳博物館

大町山岳博物館では九月二十九日にシンポジウム「岳の街おおまちと山岳環境」をサンアルプス大町（大町市）で開き、市内や近隣市町村を中心に約二〇〇名の参加者がありました。今年は国連が定める国際山岳年、さらに大町市「山岳文化都市宣言」元年にあたり、このような「町・山・博物館」をテーマにしたシンポジウムを開催しました。

まず、シンポジウムにさきがけて冒険家の平田和文さんから、今年九月に成功した深田久弥選日本百名山史上最速登頂や、自身の出身地である鹿児島県屋久島における自然環境の保護と利用に対する取り組みについてお話いただきました。つづいて、今年五月のチョモランマ登頂成功によって七大陸最高峰登頂の世界最年少記録を更新した東京大学スキー山岳部の山田淳さんに、スライドをまじえてお話いただきました。

本題のシンポジウムでは、ジャーナリストで国際山岳年日本委員会事務局長の江本嘉伸さんにコーディネーターを務めていただき、登山家で医学博士の今井通子さん、山田淳さん、信州大学農学部の中田勝義さん、ボランティア・ガイドの尾沢洋さんをパネリストとしてお招きし、当館館長の柳澤昭夫が加わって、山岳環境を取り巻く現状や、北アルプス山麓の「岳の街」としての大町市のあり方、これからの環境教育などを含め大町山岳博物館が果たすべき役割について、経験をふまえた貴重なご意見・ご提言をいただきました。

これをきっかけに、市民のみなさんと観光・登山で大町を訪れるみなさんとともに、山の環境問題や、山を最大限に活かした町づくり、さらに将来をみすえた博物館活動を考えていきたいと思えます。

對山館の時代とは何だったのか(後)

峯村 隆

對山館と慎太郎

慎太郎 人の山脈 (二)

「家の前に馬車に着く、私は胸をおどらせて迎へた。馬車から御者が取り降す客の荷物は都会の感覚を深めてゐた。大きなスーツケースにはさんである名刺に高野鷹蔵とある。ベタベタに貼りつけられてゐる汽船やホテルのラベルも「あ、山岳会の高野さんだったか」嬉しいやうな、恥づかしいやうな気持ちである。明日の日取について準備の相談を受ける。買物に奔走する。快く気のはづむ仕事であった。」(＊)

大糸線の前身である信濃鉄道が大町まで延びたのは大正五(一六一九)年のこと。それまで都会の登山者は、松本か篠ノ井線明科駅で下車し、乗合馬車(通称ガタ馬車、または円太郎馬車)で何時間も揺られてようやく大町に着いた。山旅の初日は大町か四ツ谷(白馬村)までが精一杯という時代だった。

中学から「山岳」を愛読していた慎太郎にとつて高野ら著名な登山家はアイドルであり、読書でのみ知る外の世界を伝えてくれるメッセンジャーだった。馬車の到着への期待はその意味で、不本意な「宿屋家業」の中で見出した醍醐味だった。

彼らは慎太郎にとつては「賓客」である。細心の登山準備と的確な山岳情報の提供に労を惜しまなかつたはずだ。

当時の著名な登山家は一般に文も立ち、紀行や随想を数多く残している。

「居ながらにして山懐から来る鬱気を感じると云うような気分は、何にしても大町が第一だと思ひます(中略) なつかしい山の都大町。私は山へ登らずとも、

余暇の幾日かを、對山館の、あの山の見える静かな部屋で、そして親切な人達と共に暮らすことを、又となし楽しむとしてゐるものです。」(冠松次郎)(＊)

大町・對山館・慎太郎が一体となつた名声はこうした記述や伝聞によつて高まり、對山館は登山者の定宿として定着していく。

一方、慎太郎は次のような山を愛する同世代の人々とも強い絆を結ぶ。(＊)

・石川欣一 明治二十八年生まれ。大正三年夏に初めて對山館に泊まり、以来親交を結ぶ。毎日新聞記者・随筆家。

・横 有恒 明治二十七年生まれ。旧制中学時代に初めて對山館に泊まる。大正十年アイガー・東山稜初登攀。「世界の横」として登山界のリーダーとなる。

・茨木猪之吉 明治二十一年生まれ。画家。足立源一郎・中村清太郎らと日本山岳画協会を設立。「山岳」や辻村伊助・小島鳥水などの著書に表紙絵や挿絵を描く。

・伊藤孝一 明治二十四年生まれ。名古屋の資産家。大正中期から對山館を拠点に北アルプスの深山に分け入る。

・赤沼千尋 明治二十九年生まれ。中学時代からの友人。大正十年燕山荘創始。

・山田珠樹 明治二十六年生まれ。フランス文学者。スタンダール、ゾラの研究で知られる。大正十五年ころ石川の紹介で知り合う。

こうした友人の多くは長く對山館に滞在し



登山者を見送る慎太郎(百瀬堯氏所蔵)

り、夜の對山館前にも近隣の子が大勢集まつたという。(＊)

昭和二年十二月三十日には、大沢小屋を基地に第四回冬季訓練をしていた早大登山部員十一名全員

が赤石沢に発生した雪崩に襲われ、四名が行方不明になるという大遭難が起きた。對山館を搜索本部とし、松高生の弟孝男が現地指揮をとつた。慎太郎は翌年六月に四名すべての遺体を発見するまで、搜索隊の宿舎(對山館と大沢小屋)の提供など、私費を投じて惜しみない援助を続けた。

また、明治中期から大正時代にかけて、信州のとりわけ理科に関する教育と研究は群を抜くレベルで、特に高山をフィールドとする活躍は顕著だったというが、慎太郎はそうし

て慎太郎との麓のつきあいを楽しみ、山にかけてはまた帰ってきた。

慎太郎の人は山に限らない。短歌の同志あり、地元の遊び仲間ありだが、早稲田大学や信州教育界との結びつきにも見のがせないものがある。

大正三年十二月、慎太郎は二十二歳で豊科町の熊井みつると結婚した。みつるには歳のはなれた弟の文吾がいて、慎太郎は息子のように可愛がった。文吾は早稲田大学に入学し、ラグビー部の名選手となった。この縁で昭和初期に對山館はしばしば大西鉄之助率いる早大ラグビー部の夏合宿の拠点ともなった。練習には町営運動場(現在の西公園グラウンド)が使われた。早大ラグビー部員はスターであ

たトップレベルの研究者、小学校時代の校長でもあった植物学の河野齡蔵、動物学の矢沢米三郎、地質学の八木貞助と親しく交わり、「山を科学せる三星」と称賛している。詳細は不明だが慎太郎は大正二年に北安曇教育会が発行した小冊子「白馬嶽」の編集にもあたっている。これは慎太郎の編集のみというより、かなり執筆もしたものであったのではないかと考えられている。(＊) さらに大正六年八月に日本で初めて創設された夏期大学、信濃木崎夏期大学の創設運動にも熱心だったと伝えられている。

もうひとつ特記すべきは對山館の食堂である。昭和六年ごろに慎太郎は通りに面したタキ(土間)部分を洋風の食堂に改装した。これは当初、需要の高まりから営業を企図して計画したものであったが、当時は旅館と食堂の併業が認められず、いわばサロンとして開放されたモダンな空間となった。(＊)

現在のところ食堂の様子を伝える写真は三枚しか認められていない。その一枚をよく見ると棚にはスコッチ・リキユール・シエーカーなどが並び、テーブルにはコーヒーカープ・洋皿などがおかれている。壁紙の残りは百瀬家に現存し、イギリス製のピンク・青・白の植物柄だったことがわかった。当時これだけの洋酒などを地方都市で調達することは常識では考えられないという。(＊) 写真には石川・百瀬・新聞記者の小笠原勝・弟の孝男・田の平林卓爾らが写り、雑誌を読み原稿を書き歌を歌う気ままな雰囲気漂っている。小笠原は「当町の對山館食堂は、大町に於ける唯一の社交クラブのような存在になっていた。特に永い冬の夜ともなれば、赤々と燃える食堂の暖まストーブを囲んで酒をのみ、コーヒース、りして、よも山の話に花を咲かせたあけく、夜更けの雪道を

ブラブラと帰宅するのがクラブ常連の日程であった」と語る。(*)
 小笠原に限らず大町駐在の新聞記者はみな「対山館には必ずネタがある」と、この食堂にたむろしていたという。(**)
 戦時体制が強まる昭和十三、四年までの短い期間ではあったが、ここは様々な人々が集まる自由闊達な空間だったのであり、大町随一の文化サロン・最新の情報発信基地として機能していたことは間違いないさそうだ。

対山館の舞台裏 (**)

慎太郎は対山館の「顔」として登山者には親切を尽くしたが、帳場の仕事には熱心ではなかった。旅館経営に苦勞したのは金吾であり、金吾なきあと(昭和八年逝去)は文吾の夏場の応援をリレーして、もっぱら長女美江(大正六年生まれ)だったという。みつるは台所を取り仕切り、衣食住の全般にわたって接客サービスに目をくぼり、常に対山館を下から支えた。

大正の終わりから昭和の初めのこととして、対山館には料理人と使い走りの小僧さん、ねえやさん(女中)が六人ほど、ご飯炊き、布団の維持管理をする「お布団婆」が一人か二人いて、別に「もうや」と呼ぶお子守のねえやが慎太郎の娘ごとについていた。夏場はさらに、ここに臨時の手伝いが加わった。大勢の客とあいまった盛況が想像される。

山と慎太郎

明治三十九年夏、初の白馬登山で山に魅せられた慎太郎は、以降毎年のように白馬に登った。明治四十四年と記されたスケッチ帳には、「第五回白馬登山」の模様と、遠山品右衛門らに伴われた十月の針ノ木峠・黒部行の様子が見録されている。今まで針ノ木との出会いは四十三年、十八歳になる年ということ

になっているが、本人も「十九年の初雪の時であった」と書いてもいる(*)
 からは四十四年のこととも思われる。

その後、○大正二(一九一三)年七月の針ノ木から大黒岳までの後立山連峰縦走、八月の烏帽子から途中黒岳・赤牛を往復しての槍ヶ岳までの縦走○大正三年七月の葛温泉・東沢乗越經由中房行、同月末の立山・剣初登山○大正四年七月の石川との鹿島槍・爺ヶ岳行と、二十代前半の慎太郎は精力的に山に入っている。

このうち針ノ木から八峰キレットを通過しての後立山連峰縦走、慎太郎のいうところのこのコースの「逆走」は登山者としての初記録となった。本人もそれを意識しての試みだったのだが、この山行記の冒頭にさえ「征服」とか「開拓」とかの言葉とは縁遠い慎太郎の山への心情が表されている。

「山国と呼ばれる信州の、然かも此の大山脈の膝下に生れて、二十余年の生を私は送った。一枚の障子を開けさへすれば、一歩門を出さへすれば、威圧する様に迫る北アルプスの連峰は物心の付く頃から、常に私をチャームして私の全心を奪って来た。(中略)山は私の厳格なる父であった。慈愛の母であった。ある時は恩師でもあり、ある時は恋人でもあった。万有であり、神秘であり、無限であった。あ、無窮に偉大なる山の人格よ。渺くとも私は、大自然の玉座の前にひれ伏して執実な祈禱を捧げ得るだけの真心と信仰を有つてゐる。」(**)

こうした純粋な山岳観は慎太郎の生涯を貫き、そこに山で結ばれた人々が幾重にも重

なつて晩年の心境に至つたと想像する。

自分をさして(戦争で)物質に敗けたものは心に生きるより外はないからである。その心の寄り所は山への思慕であり、山への憧憬を有つ人々への懐しさである。とも「山を想へば人恋し、人を想へば山恋し。童謡ならぬ老謡を口吟みながら、我ながらいつまでも抜けきれない老センチメンタリストを自分に発見するのである。」とも語っている。(*)

大正十二(一九二三)年三月、伊藤・赤沼らと成功した積雪期の立山・針ノ木峠横断も登山史上画期的な記録だったが、三者とも根本的には「純粋な個人的夢の実現」だったため、ことさらに自慢しなかった。



対山館の食堂 (百瀬堯氏所蔵)

後述する大町登山案内者組合の設立(大正六年)も、大沢小屋(大正十四年)と針ノ木小屋(昭和五年)の創設も、いわば時代が慎太郎に決心せしめた、「営利」とはほど遠い業だった。

大沢小屋建設の経緯にふれて、大正十年に燕山荘を創始した赤沼は、「山を冒瀆するものだ」と暗に小屋を建てた自分を非難する親友の百瀬を再三誘惑してその

の気にした旨を記している。(*)
 当時大沢出合には石室があった。にもかかわらず家族の反対を押し、隣接して木造小屋を建てたのは、今後盛んになるだろう冬山登山の避難小屋としての石室の失格を大正十二年二月の山行(*)で痛感したからだともい

われ、針ノ木小屋についても早大雪崩遭難の教訓と登山者の増大をにらみ、登山基地・避難場所としての必要性を再確認したからだともいわれている。

もつと慎太郎

野遊びの昼の一場面。石川が持参した薄切りのベーコンが焼けども焼けども出てくる。これを見て慎太郎は「なるほどこれがベーコン不滅ですね。」(*)

慎太郎は山への深い造詣とともに、芸術文化諸般の広範な教養を身につけていた。さらに当時の人には珍しく独特のユーモアのセンスを持ち合わせていた。遺稿集のなかで小笠原は慎太郎を「文化人というより趣味人とか通人といった方がふさわしい」と語っている。そのあたりに多くの人を惹きつけた慎太郎の魅力の源があったと思う。

遺稿集には生涯に詠んだ短歌六百首以上が取められている。歌人百瀬慎太郎の面目は周知のところとして、実娘三氏への聞き取り調査などで得た、あまり知られていない横顔のいくつかを紹介しておきたい。

○酒 対山館の茶の間の壁際にはいつも薦被り(四斗樽)がすわっていた。これは業務用であるとともに自家用だった。樽から片口(*)に酒を移すときの「ゴボン、ゴボン」という音は印象的で、対山館の名物のひとつだった。酒を愛した慎太郎は、友の来訪を喜んで茶の間に招き入れ、この樽酒を酌み交わしつつ語り合った。九谷の酒器と灘の酒を好んだという。

○英語力と読書 慎太郎は英語ができた。愛用の辞書は使い込まれて手垢で汚れ、アンダーラインや書き込みがたくさんあったという。蔵書は山の本はもとより、洋の内外、古典と否とを問わない文学、地理、歴史書などを中心として膨大な量に及んだ。廃業のとき、できたばかりの大町図書館に多数寄贈してもなお仮住まいには本があふれていたという。

図書館長になりたかったという晩年の逸話も興味深い。(＊18)

○子ども好き 近所の子や、夏休みに長くあずかった石川や山田の子どもたち、それに娘たちを引き連れては、ユニフォームたる着流し姿で農具川や靈松寺、遠くは木崎湖へよく出かけ、山々のことや諸般の教養を面白おかしく道々伝授したそうだ。「俺は桃太郎になった気分だ」と語った光景が目につく。

○分け隔てなきつきあい 慎太郎は高飛車に権威をふりかざす人を嫌った。逆に社会的に弱い立場の人々には何の区別もなく接し、家族が心配することもたびたびだったという。これは身分・地位・財産などではなく、「山」で心が結ばれることに最大の喜びをおぼえ、「それが唯一の財産だった」と語る登山者とのつきあいの姿勢にも通じる。

大町登山案内者組合(＊19)

大正二(一九一三)年に陸地測量部の五分の一地形図北アルプス部分発売。大正五年七月、信濃鉄道松本・大町間開通。登山者はいよいよ増大した。一方登山界では、この二つの歴史的事実と呼応するように、質の高い山案内人の安定的な供給を求める声が高まった。(＊20)

大正六年六月、慎太郎は独力でわが国初の山岳ガイド組合、大町登山案内者組合を結成し、対山館に事務所をおいた。これは先時代の要請、河野齡蔵らの助言、地元案内人の誇りと生活の安定などを勘案しての決断だった。この動きはやがて白馬・有明・烏川などの近隣の登山口へと波及する。

事務所を対山館におくことは「我田引水」ととられかねない。慎太郎にとってそれは実に不本意なことだった。しかし組合活動など

になじみのない案内人たちの束ねの場は、対山館以外にありえなかつた。慎太郎は登山者と案内人との間でいっそう心を砕かねばならない立場に自らの身をおいたといえる。

案内者の心得の冒頭には「純朴にして善良なる山人の気風を重んじ・・・」とあり、次に「登山者に対しては出来得る限り親切丁寧を旨として・・・」とある。この二条こそが慎太郎の理想の根幹をなしていたようだ。

「山岳夜話」の中の「山人は山人らしく」と題する一文には「山人と都会人との結びつき、良き登山者に従ってその教養の一端にふれる有難きもあらうし、せ、こまじい都会生活者は思ひがけないおほらかな素材さに嬉しさを見出すであらうし、そこに友情的な愛情さへ醸される。これは意識的、計画的に構へる必要はない。そこに山が有る偉大な意味があるのでないかと思ふ。山では総の人が無垢に返る。(中略)山の案内人達が示し得た「親切」はその技術や智識以上に登山者を愉ませるものである。勿論、押光や阿諛の親切とは違ふ。」ともある。

これは慎太郎の生きざまそのものである。「山麓の正統派岳人」の理想像といつてもよいと私は考える。組合の現実はずいぶん慎太郎の思わくどおりとはいかなかったようだが、甲斐あって多くの優れた人材が育ち、大町山案内人の名を高らした。(＊21)

対山館その後

昭和十八(一九四三)年六月、対山館はおよそ五十年の幕を閉じ、戦時体制の強化の中で軍需工場とされた昭和電工の寮となり、戦後は個人の医院となった。

一家は近所の借家に移り住み、慎太郎は昭和二十一年七月、大町観光協会設立にもない専従、二十二年、横有恒と日本山岳会信濃支部設立に尽力、二十三年、日本アルプス小屋組合副会長就任と、戦争の痛手を胸に社

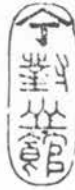
会的な働きをするとともに、「山岳夜話」などの随想を書き始める。

新時代を迎えさらなる活躍が期待されたが昭和二十四年三月五日、食道癌のために世を去った。享年五十六歳三ヶ月。

大沢と針ノ木の小屋は長女美江に、現在は孫の堯に継がれ守られている。

大町山岳会は昭和二十八年八月、慎太郎と懇意であった平林武夫が主唱し、横・石川との連名で大沢小屋入り口に慎太郎を偲ぶ銅製レリーフを建立、昭和三十二年には大沢小屋前で慎太郎を偲ぶ祭りを挙行した。翌年からは「慎太郎祭」として毎年開催されることとなり、今年で四十五回を数える。

昭和三十七(一九六二)年八月、百瀬慎太郎遺稿集刊行会が『山を想へば』を発売。慎太郎の三女、遠藤三春を中心に、清水悟郎・平林武夫・佐藤貢・小笠原勝らの協力を得て世に出した個人の記念碑であるとともに日本登山史上貴重な文献となった。



「山を想へば人恋し 人を想へば山恋し」の名言を慎太郎の名とともに不滅としたのも、この遺稿集によるところが大きい。

おわりに
運命の譜上にあつて、慎太郎の心よりどころ、個性の発露の対象として「山」があつたことは、後人にとって幸いである。

「天の時 地の利 人の和」という孟子に引く言葉がある。「岳 大町対山館 百瀬慎太郎」の関係は極めて自然にこれに副うていた。もしも「対山館の時代」がなかったら、大町の歴史はその個性的側面において大きな翳りを落したことだろう。

当時の輝きを今後の糧としたい。(おわり)

- (＊1) 百瀬慎太郎「山岳夜話」(二九四八)
- (＊2) 「大きな大町」『溪からの山旅』(一九三七)より
- (＊3) 飯島善久代 本企画展解説(二〇〇二)より
- (＊4) 遠藤三春氏談(二〇〇二)
- (＊5) 相澤亮平氏談(二〇〇二)
- (＊6) 井垣美和氏・遠藤三春氏談(二〇〇二)
- (＊7) 横川仁氏談(二〇〇二)
- (＊8) 「百瀬慎太郎遺稿集・山を想へば」(一九六二)
- (＊9) 井垣美和氏・遠藤三春氏談(二〇〇二)
- (＊10) この節は井垣・遠藤・寺田美穂(慎太郎四女)各氏談話(二〇〇二)を総合して記述した。
- (＊11) 百瀬慎太郎「針ノ木峠談」(一九四八)
- (＊12) 百瀬慎太郎「後立山連峰遊記」(一九三三)
- (＊13) 百瀬慎太郎「山岳夜話」および「針ノ木峠談」
- (＊14) 赤沼千尋「山の天辺」(一九七五)
- (＊15) 当初は針ノ木峠越え立山登山の予定だったが、猛吹雪で大沢石室に五泊停滞、下山。翌月の富山側からの再挑戦となった。このとき石室の寒さや焚火の煙の充満に苦しめられている。
- (＊16) 石川欣一「可愛い山」(一九八七)
- (＊17) 液体を小分けするときに使う「ヶ所」に注ぎ口のついた陶製の器。
- (＊18) 飯島善久代 本企画展解説(二〇〇二)などより
- (＊19) 関 悟志 本企画展解説(二〇〇二)などより
- (＊20) 地図が出て登山道や小屋の整備は途上であり、野営が主であった。安全のために山案内人や荷担きを伴う登山スタイルは昭和前期まで続く。
- (＊21) 慎太郎の客さばきの手腕や登山物資の調達法、案内人の仕事やプロフィールなども興味深い紙数の都合で制愛した。企画展示をご覧いただきたい。

(大町山岳博物館学芸員)

山と博物館第47巻第10号

発行 二〇〇二年十月二十五日発行
長野県大町市大字大町八〇五六―一
市立大町山岳博物館

TEL 〇二六―二二二二二二
FAX 〇二六―二二二二二三
印刷 大糸タイムス(株)

定価 年額 一、五〇〇円(送料共) 切手不可
郵便振替口座番号 〇五四〇〇七―一三三三